令和７年度第１回教育課程編成委員会　議事録

【日　時】令和７年７月６日（日）１５：００～１６：００
【会　場】こころ医療福祉専門学校　３階　講堂
【委　員】出席：大木田治夫，志岐浩二，髙比良宏輔，松永正司，瀬戸口勇二，
森﨑太一，川﨑和幸
藤原善行，髙田一樹
大石勝規，谷口幸太郎，永田俊晴，髙橋美如
欠席：有村俊男　（敬称略）

１　理学療法科

＜大石学科長＞

昨年度からの課題と取り組み

（１）　臨床実習受け入れ調査時期について

長崎県内専門学校２校の受入調査時期を聴取し，時期を同じくして，これまで年度末の２月末ごろに実施していた調査を，６月に変更する。他校との実習受入れ調整の時期と合わせることで，臨床実習地としては，調整しやすくなることが狙いである。

（２）　臨床実習カリキュラム再編成の実習地への共有について

前述の臨床実習受け入れ調査郵送書類において，変更を丁寧に伝え，混乱の生じないように協力を得るよう文書を作成している。臨床実習地訪問でも，直接，説明して理解，協力を得ていくよう努力する。

（３）　臨床実習教育要綱の一部改編について

昨年度の課題として，臨床実習を欠席する際の教員と指導者の情報共有に対する「見える化」が論点に挙がった。学生が提出する欠席届に教員への連絡の有無をチェックする項目を追記した。また，体調不良を有する場合，原則としては医師の診断を仰ぎ，実習教育者と相談することを明記した。

その他，実習中において規律を乱す行為についての厳正な対処の可能性や，アルバイトについての情報共有の必要性について追記した。

（４）　臨床実習教育への教員の参画について

長崎北徳洲会病院と臨床実習生の受入強化と就職希望者増加に繋がる関りを目的として，実習教育者育成のための卒業生を含む経験の少ない理学療法士の指導，教育を含めた包括的かつ定期的な関りの契約を交わした。臨床実習期間も継続した取り組みとして，学生の臨床実習教育にも参画する。

西諫早病院でも，同様に多くの実習生を受け入れてもらえる体制づくりと臨床実習教育の質の向上を図るため，教員の臨床参加型協働教育に取り組んでいる。

長崎北病院では，通常１回しか行わない臨床実習地訪問を多く取り入れ，学生の課題の抽出，問題解決を促す関りを試験的に実施する。

（５）　就職活動と理学療法士の働き方の魅力の発信について

国家試験との兼ね合いもあるが，早期より就職活動できるように，低学年次より理学療法士の働き方について，授業内でも伝え，積極的に外部からのリクルート活動での声を，学生の耳に届くように対面での職場説明なども受け入れていく。

＜大木田委員＞

（１）臨床実習受け入れ調査について

他校と同じ時期にすることは同意する。他校は次年度分を調査してくるため，その点も，留意して対応を検討することを提案。

➡早速，今年度送付分より調査年度の対象を修正して郵送した。

（２）臨床実習教育要綱の一部改編について

欠席の際の連絡，報告の徹底と，情報共有の工夫について評価する。諸般の事情により実習中にアルバイトを行う学生については，感染対策や実習での教育効果に影響が出ないことを留意し，実習教育者との情報共有などサポートすること。

（３）理学療法士の働き方の魅力発信について

特に長崎県内の医療機関への就職採用の受入については，現状維持か減少も考えられる。介護領域や，放課後デイや有料老人ホーム，訪問看護ステーションなどに留まらず，インフォーマルなサービスでの社会進出も学生の就職先になり得る時代である。職業の魅力を，現場の声として学生に届けることは，一定の意義を感じる。

（４）ボランティア活動やトレーナー活動について

他校と比較しても，多くの機会を設けていることは良いことであると感じる。より効果的に学生の社会性向上を意識して，継続すると良いと思う。

（５）その他

学校関係のハラスメントはメディアで取り上げられやすい。学校職員や実習施設の指導者，および学生にも，対応の方法など指導が必要ではないかと考える。

＜志岐委員＞

（１）臨床実習受け入れ調査について

他校と同じ時期にすることは同意する。自施設でも７校からの学生について，多職種の受入も調整している。看護師や介護職の実習受け入れなど，リハビリテーション専門職だけでの調整でない施設もあるため，丁寧な対応が必要である。

次年度分を調査することについても，同意する。

（２）臨床実習教育要綱の一部改編について

欠席の際の連絡，報告の徹底と，情報共有の工夫について評価する。荒天時の対応や，

前日等事前の判断が必要な場合など，実習施設と教育者任せになるが，貴重な学びの機会を重要視する理念の共有は必要である。しかし，学生の安全を最優先するものであり，公共交通機関の運行状況なども目安にして，ハラスメントと受け取られない等に配慮も必要である。

（３）理学療法士の働き方の魅力発信について

新卒での就職先としても，経験年数の少ないキャリアでの放課後デイや有料老人ホーム，訪問看護ステーションなどに留まらず，インフォーマルなサービスでの社会進出は，今後も多くなるであろう。職業倫理としての知識，技術の研鑽や，後進の育成にかかる生涯学習の意識についての教育は必要と考える。２年次の理学療法管理学での必要な情報提供を継続して欲しい。

（４）その他

卒業生が学校ごとに日本理学療法士協会にどれぐらい入会しているか。生涯学習を促進する意味でも，入会について促していければいいと思う。

＜大石学科長＞

倫理や生涯教育の重要性は平素から意識しており，教員間でもその意識を共有して教育にあたっている。この点については学生の保護者との関係性にも影響する。学生には実習前のオリエンテーションでも関連知識等を周知しており，国家試験にも倫理等に関連した問題が出題されるので，授業にも反映しながら引き続き対応していきたい。

２　介護福祉科

＜谷口学科長＞

（１）前回の議題について

ア　卒後研修について

就職先施設に案内を発送したことで，就職先から申し込みがあったケ　ースがあったので，今後も就職先への案内の発送は継続していく。しかしながら，今年度は VR を用いた研修を行ったため費用が発生したためか，卒業生の参加が芳しくなかった。令和７年度は介護技術の研修も検討していたが，そもそも近年の介護福祉科の卒業生は留学生が多く，日本人が少ない現状となっているため，対象者を留学生の卒業生と卒業後間もない日本人をメインとして，「記録の書き方」などの研修も候補に挙げている。

イ　「国語表現」について

「国語表現」の授業において，実習における記録や，就職後に介護記　　録を書くにあたり，文章力向上を目的に授業を行っている。令和４年度から科目の内容を変更し，３年が経過したため，改めて内容についてご意見を伺いたい。文章を書くという実践力において大きな成果があるとは言い難い状況ではあるが，知識としては取得

できている学生が多い。現在のカリキュラムでは，敬語，文章表現の基礎，要約，自己 PR，文章を読むなど１５コマの中で様々内容を行っているため，ある程度分野を絞って実践力を養う演習を行うコマ数を増やしてもいいのではないかと科内で意見が上がっている。なお，介護記録の書き方に関する授業は「コミュニケーション技術」の授業内でも２コマ実施している。

ウ　日本人入学者について

今年度の介護福祉科の入学者は４３名で，そのうち日本人１３名，留学生が３０名となった。Ｒ５年度も１３名，Ｒ６年度は１０名となっている。「経過措置」の延長について情報はないが，外国人留学生については今後も入学を予定している。しかし，やはり日本人の介護人材の育成は至上命題であり，１５名程度の入学者の確保は必要である。

介護に興味をもつ学生を増やすためには，小・中学校からの関わりが必要だと考えており，長崎県介護福祉士会との連携は必要不可欠である。学校としては種まきにはなるが，昨年度協力させていただいたような，基礎講座に本校学生や教員が帯同する取り組みを，今後も継続できればと思っている。

これらのことについて，本日御欠席の有村委員からは，事前に次のような意見をいただいている。

（１）卒後研修について

案内の方法については，就職先施設と卒業クラスの LINE グループへ周知する現状の方法で問題ないと思う。

留学生を主な対象に記録の書き方の研修をする場合，多くの施設でタブレット等を使用する ICT 化が進んでいるので，書式に合わせた書き方というよりも，記録物に相応しい単語選びや，簡潔でわかりやすい文章の作り方等に焦点を絞ってはどうか。介護経過などを文章で入力することは多々あるので参考になるのではないか。

その他，今後の研修テーマとしては，認知症ケアについて理解を深めることや，事例を通してコミュニケーション方法（利用者の暴言に対する対応や，帰宅願望の強い利用者への対応等）について検討すること，アンガーマネジメントを学ぶことなどは有意義である。研修テーマを検討するに当たっては，卒業生が学びたいこと，就職先事業所が卒業生に学ばせたいことについてアンケートを取ってみると良いのではないか。

（２）日本人入学者について

長崎圏域人材育成確保対策地域連絡協議会の取組に，今後も養成校の教員や学生に参加してもらうことは非常に有意義である。昨年度同様に，小学生対象の基礎講座に協力してもらうことの他に，小学生が参加する介護キャンプに養成校の学生も参加して，自身が介護福祉士を目指した経緯などの話を，参加小学生に話してもらうこ

とも意味があるのではないか。

＜髙比良委員＞

（１）卒後研修について

テーマによって参加が左右される部分はある。こころ医療ならではというか，卒業した学生は県内の各施設で働いている状況だと思うので，そういった卒業生がまた集まって情報共有の場になってほしいと思う。記録の書き方は事業所によって違うので，外国人を対象にしたとしても難しいのではないか。卒後の勉強会をしたいのか，意見交換の場としたいのかによって変わってくると思う。意見交換の場とするのであれば，自分たちの成功談や失敗談，また学校での勉強と現場での違いなどを共有してもいいのではない。そういう場であれば，事業所としては勉強として送り出したいという思いもある。他には，虐待防止やビジネスマナーの研修などは事業所としては行かせやすい研修だと思う。

コロナ禍で人が集まりにくかった時期があった中で，こころ医療福祉専門学校が行う研修があるというのは魅力的なことだと思う。事業所側としても，職員を送り出しやすいテーマで開催してもらえると良い。

（２）「国語表現」について

確かに１５コマという中では詰め込みすぎていると思う。継続は力なりではないが，例えばだが，９０分の授業の中で，８０分授業をして残り１０分で授業の振り返りやポイントがどこだったかなどを書かせてもいいのではないか。実習に来た学生が一番疲れているのが記録であり，書きなれていない記録を書くのが負担になっているのであれば，普段から書かせるのも方法なのではないか。

授業の内容としては，あまり詰め込まずに視覚的に楽しく理解できるような内容がいいのではないか。メディアリテラシーなどはもっとボリュームを入れてもらってもいいと思う。卒業生の記録などが残っているなら，それを見せたり訂正させたりというのも面白いのではないか。シミュレーションした介護の場面を，文字起こしさせたりしても勉強になるのではないか。

実習生の様子を見ると，記録を書くことに最も苦労している印象がある。ここ数年の学生は，0 を 1 にする作業が苦手なようだ。実習施設を知らない人にも伝わる記録を書けるようになってほしいと思う。

＜谷口学科長＞

卒後研修に関しては，いただいた御意見をもとに，どのような場として開催するのか，現在科内でも協議・検討しているところである。卒業生にもアンケートを取りながら進めていきたい。次回，検討結果を報告させていただきたい。

国語表現の授業についても，次年度のカリキュラムについて担当教員とともに検

討している。こちらについても次の機会に報告する予定である。

３　柔道整復科

（１）前回の提案への取組み

ア　国試対策の家庭学習の実施

・家庭学習用の放課後課題を提出し、授業にて理解度を図る小テストを実施

・午前中に国家試験の過去問題解答を義務付けて実施

イ　非常勤講師との連携について

・講師会の実施

・模擬試験後に結果を共有し授業の中身へ反映する意見交換を行う予定

ウ　勉強方法のマニュアル化について

・過去問題の活用方法、模試の解説方法をマニュアル化して配布

・点数取得８割を目指したマニュアルを配布

エ　臨床実習の内容について

・臨床実習毎に学校からの目的と学生本人の目的を設定

・学生が実習中に実施した実技・施術内容について指導者間で共有できるファイルを検討中

（２）授業内容について

（３）長崎県内の就職率の向上について

＜松永委員＞

（１）授業内容について

国家試験（柔道整復実技審査・柔道実技審査）合格に向けた取組みは、必須であり必要不可欠だと思われる。限られたコマ数の中で、更に、特別授業を実施するのは、学校として大変に労力が掛かるものであるが、実現に向けて頑張って貰いたいと思う。

〇具体的な修得技術に関しては別紙を参照して欲しい。臨床実習に備えて検査法一覧を記載した簡易冊子を作成してみてはどうか。その冊子自体も学生に作成させてみる。そうすれば実習の現場で指導者の先生方が行っている検査法の意義や目的、必要性も理解することができると思う。

〇経費は掛かるが、柔道協会への入会を検討してみてはどうか。入会することで協会から大会案内が届く。その大会に学生を帯同させ、トレーナー活動を行わせることもできる上、大会参加者は小学生・中学生もいる。小さい頃から柔道整復師と触れ合うことで将来的に柔道整復師を目指す柔道経験者も増やすことにも繋がる。長期的に行動する事も必要だと思う。

（２）長崎県内の就職率の向上について

県内での就職率向上については、実習先（研修）数を増やし受け入れ先の門戸を広げる。合同就職説明会を学年に関係なく年度ごとに定期的に実施するなど、学生とのコミュニケーションを図り理解を深める事が大事だと思う。また、早い段階での就職活動実施については、学力（知識）と技術の向上が第一と思われ、学校として最善の努力をお願いしたい。また、県内の整骨院でも後継者不足で、今後、卒業生で県外就職しＵターンをして独立開業をしたい資格者との面接も並行して実施してはどうか。

〇臨床実習とは別の機会で、整骨院の見学会などを開催してみるのはどうか。企業と学生の要望がマッチングする可能性も十分にあり得ると思われる。

〇（１）の議題とも被るが、特別授業の案の一つとしてエコー画像の授業を実施してみてはどうか。現代ではエコー検査を取り入れている整骨院も多い。在学中にエコー検査を習得することで就職活動時に有利に働く可能性もあるはずだ。授業自体は物理療法メーカーへ依頼すれば教員にも負担はかからない。検討してみて欲しい。

（３）その他

学生の学習促進策について，宿題や補講，テストなど，学生にとってタイトな対応となることに加え，教員の方々の負担も大きいだろうと考えるが，信頼できる専科教員が揃っておられるので，ぜひよろしくお願いしたい。

柔道協会への入会については，強制しているわけではなく，年に数回の大会に参加でき，非常にいい経験ができる。年会費の負担はあるが，黒帯を目指す人たちなどに寄与できればいいと思っている。

エコーに関しては，これから必要となるものだと考えられるので，学生にもぜひ知識を持ってほしい。

就職に関して，職場見学に来てもらえればマッチングの可能性が高まる。高齢化も進んでいるので，若い人材に引き継ぐ機会も増やしたい。ひいては，長崎に柔道整復師が根付いていくことにつながればと思っている。

＜瀬戸口委員＞

（１）授業内容について

ア　症例ベースの統合型授業（月１回）

〇内容：模擬症例を元に、評価 → 固定 → 理論解説 → 国家試験演習までを一連で行う

〇目的・効果：知識と技術の関連性を実感し、「なぜ学ぶのか」が明確になり、理解意欲と国家試験対策への納得感が向上する

〇実施方法：教員が共同で授業設計。学生参加型（実技→意見交換→解説）で進行

イ　達成感のある短期スキル講座・ミニイベント

〇内容：「テーピング１日講座」「包帯スピードコンテスト」など成果が見える講座

〇目的・効果：「できた」という実感が成功体験となり、実技や座学へのモチベーションアップにつながる

〇実施方法：成長を“見える化”。講座後は振り返りシートを活用

ウ　症例調査・学生発表の導入（グループワーク）

〇内容：症例を調べ、評価・処置・理論・対応をまとめて発表

〇目的・効果：調べる→理解する→伝えるプロセスで知識定着・臨床的視点が育つ

〇実施方法：授業内で準備・発表、教員はサポート・講評

（２）長崎県内の就職率の向上について

ア　地元施設見学・地域ボランティア活動

〇内容：整骨院・リハ施設見学、スポーツイベントへの参加

〇目的・効果：「地元でも働ける」と実感し、県内就職が現実的な選択肢になりえる

〇実施方法：授業内または課外に実施、事前準備と事後振り返りあり

イ　卒業生キャリアトーク（年２回）

〇内容：卒業生が仕事のやりがいや現場を語るイベント

〇目的・効果：ロールモデルの話で、将来の自分が明確にイメージできる

〇実施方法：質疑・交流タイムも設定。録画共有も検討

ウ　県内就職先の教育体制・キャリアパスの可視化

〇内容：育成制度・成長事例を動画・資料で紹介

〇目的・効果：「県外でしか成長できない」との誤解を払拭し、県内の可能性に気づく

〇実施方法：取材に基づいた資料作成。校内ガイダンスなどで紹介

（３）その他

自主的に行動する若い従業員が減っているという印象を持っている。技術を見て盗むということが難しくなっているのではないか。小さな成功体験を積み上げることでモチベーション向上につながる。なぜ今これを勉強するのかという意識を持ってほしい。学力に課題がある学生についても，実技での成功体験があれば座学への意識も向上するのではないか。

＜永田学科長＞

授業ではどうしても「教える」「教わる」という関係性があるが，理解する，わかるという段階まで引き上げていきたい。

就職の課題についても，いただいた御意見をもとに，長崎の業界に貢献できるよう，対応していきたい。

（別紙）

認定実技以外の臨床現場で最低限必要な知識・技術として

Ａ．徒手検査法

頚部	・ジャクソンテスト	・スパーリングテスト
胸部	・アレンテスト	・モーリーテスト
肩部	・ヤーガソンテスト	・スピードテスト
	・ペインフルアーク徴候	・ドロップアームサイン
	・インピンジメント徴候	
肘部	・チェアテスト	・チネル徴候
手関節	・ファーレンテスト	・チネル徴候
手指	・フィンケルスタインテスト	
腰椎	・ＳＬＲ テスト	・ケンプテスト
	・ラセーグテスト	
股関節	・トーマステスト	・パトリックテスト
膝関節	・マックマレーテスト	・アプレイテスト
	・前方引き出しテスト	・側方動揺性テスト
	・ラックマンテスト	・オベールテスト
	・Ｐ－ｔａｐ	
足関節	・前方引き出しテスト	

Ｂ．腱反射

・ＢＴＲ　・ＢｒＴＲ　・ＴＴＲ　・ＰＴＲ　・ＡＴＲ

Ｃ．病的反射

・ホフマン反射　・バビンスキー反射　・膝，足クローヌス

Ｄ．ＭＭＴの５段階評価

※社団長崎学術部員作成

４　鍼灸科

（１）触診授業について

（髙橋）今年度も昨年度に引き続き１年次から触診を取り入れて，２年次までに繰り返し行い，ランドマークを確実に探せて，体全体の評価や異常がわかるようにしていこうと思っている。その先に施術があるので，まずは骨や筋肉，関節をしっかり学ばせたい。

（森﨑）自分は学生の時に，帝京大学の解剖学の先生が授業に来られていた。解剖見学も帝京大学に行った。特に骨と筋の勉強の時に，その先生にみっちり教えてもらい，けっこう身に入った。その時に筋肉の意味がわかったように思う。

（髙橋）筋肉の意味とは？

（森﨑）その先生がはじめから，「筋肉は骨に着いているゴム。それが縮むことで骨が動く。だから単純。骨は支柱であって，筋肉で動かしているだけ」と繰り返し話されていたことが印象に残っている。難しく考えないで，イメージすれば単純。それで立体構造をイメージするとわかりやすいと言われ，それでイメージできるようになった。

（２）解剖学の授業について

（髙橋）最初から専門用語ばかりで授業をすることで，解剖学に苦手意識を持たせている側面があるかもしれない。

体の仕組みを知って施術できるようになることが目的なので，そこからあまりはずれないようにしたい。国家試験に合格させることを教員が意識しすぎて，１年次から専門用語を詰込むばかりの授業だと，学生は面白みを感じずにやる気を失ってしまう。その結果，苦手になり成績も低迷する。学ぶ楽しさ，面白みも体験させつつ，施術にも活かせる生きた知識にしていきたい。

（森﨑）骨や筋を学んでいくと，首は首のところにある筋肉だけで動かしていないこと，逆に腰は腰の筋肉だけで動かしているわけではないことがわかる。なので，首の問題の時は腰近くまでみるし，腰の問題の時はもっと上までみる。そういうことがわかったうえで施術ができるようになるといいと思う。

（髙橋）個々の筋肉は知っていても，腹落ちしてない，活きた知識になっていないのでそのようなことに気づけない，想像もできていないのかもしれない。気づく方向にもっていくためには，体が動く仕組みについて，かなり柔軟に授業を組み立てる必要がある。今の学生は耳だけで解説を聞き取ったり，メモをとることが苦手なので，今年から１年生の解剖学は座学中心から，模型，動画，触診などを駆使した授業に移行している。実際に模型の骨を触ったり，自分やお互いを触診したり，ボディペイントをしたりなど，体感しながらの授業は時間がかかるが記憶には残ると思うので，続けてみて，授業の知識を生きた知識に繋いでいきたい。

（３）入学生について

（川﨑）今年の入学生はやはり社会人が多いか。

（髙橋）今年は社会人は半分ほどだが，年齢層が離れていて，高校新卒と 20 代前半が３分の２。３分の１が４０代，５０代。

（川﨑）カリキュラムや授業などは変更はないか。学生の傾向としてはどのような感じか。

（髙橋）カリキュラム等は変更ない。ただ，国家試験が同じ問題が出題されないので，単純な問題が減り，複雑な問題が増えてきているので，入学後すぐ授業で小テストなどを繰り返し行って，「知識を習得する」という意識を持つようにしている。

最近の入学生の傾向は，「東洋医学って面白そう」という興味で入学してくる新卒や社会人が増えてきている。興味を持ってもらえるのはいいことなのだが，国試合格のために相当勉強しないといけないという意識が薄い場合がある。なので，覚悟を決めて勉強に向き合う姿勢を早めに作ってもらえるようにしている。小テスト，担任との面談，放課後補習などを頻繁に行っている。

（川﨑）今はタブレットなど機器があるので，そういうのを活用できるのでいい。以前は本しかなかったので，今は動画を見たらわかるし，自分ですぐに調べられるのでいいと思う。タブレットやスマホは授業中に使ってもいいのか。

（髙橋）使用は認めている。授業に関することを調べたり，教科書や資料をタブレットに入れて持って来ている学生もいる。ただ，効率的に活用している学生と資料を入れて勉強したつもりになって活用できていない学生もいる。費用もかかるものなので特に推奨はしていない。

ただ，教員はできるだけ活用するようにしている。耳から聞いて理解できるようになることも重要だが，見ることで理解できる・伝わることが多い。できるだけ視覚化して伝えるようにしている。

（川﨑）学生が興味を持つようにしていくといいと思う。そこからスマホやパソコンで自分で調べられるし，使うものがあるので以前よりは楽なのでは。

（髙橋）確かにそうやってうまく機器を使えば，理解しやすい，勉強しやすいという気づきにつなげられたらと思う。

（４）外部臨床実習について

（川﨑）今年度の計画は？

（髙橋）来年の２月，２年生の外部臨床実習を計画している。昨年度は学生の希望と実習先のマッチングがとてもうまくいき，「とても勉強になった」「実習に行ってよかった」という声ばかりだった。担当の先生方の対応に感謝している。

（川﨑）２日間というのは短いようにも思うが，朝から夕方までなら，どこかの時間帯で説明したりできるのでそのほうがよい。こちらが忙しくて説明する時間が

充分にとれないことがある。せっかくの実習が学びにならなかったのでないかと懸念する。

（高橋）現場の治療院に身を置くこと自体が学びなので，つきっきりで説明を受けられるわけではないこと，主体的に観察や体験学習をしてくるように伝えている。しかし，自ら考えて動くことが苦手な学生もいるので，２年前から，事前に，見学したいこと・質問したいことを考えて記入し，それを実習先の先生にお渡ししている。これが非常にうまくいっているので続けていきたい。

（川﨑）実習施設はどのくらいあるのか。鍼灸院の実習施設はあるのか。

（高橋）現在，実習施設は１２施設ある。すべて鍼灸整骨院で，個人の鍼灸院はない。実習施設になっていただくためには，①開設して５年以上，②実務経験５年以上の臨床実習指導者がいる，③施術日における１日あたりの平均受療者が５人以上，という条件がある。個人の鍼灸院では，③の条件が難しいことが多い。ただ，仮に個人の鍼灸院が実習施設になっていただいたとしても，実習時間中ずっと実習生と２人きりという状況になるのは，かなり負担が重いと思う。患者さんの見学の同意をいただけない場合も考えられるので，現在のところ，個人の鍼灸院での臨床実習は難しいと考えている。

（５）その他

（川﨑）実習の受け入れについて。1 回あたり 2 名ずつほど受け入れているが，事前に学生にアンケートを取って，その回答に沿って実施している。これからは多職種連携が重要になり，地域包括ケアシステムへの鍼灸師の参入も必要である。卒業後は他職種との連携が必須になるので，学生のうちから学習を深めてもらいたい。

（髙橋）多職種連携を学ぶに当たっては，臨床実習が非常にいい機会になる。デイサービスを併設している事業所では見学をさせてもらえることもある。
この他，他学科の卒後研修に参加したり，学内の行事で他学科の学生と交流する機会も貴重と考えている。そのような機会への積極的な参加を促していく。

５　質疑応答

（髙比良）令和 6 年度の入学者について，長崎市，諫早市，島原市からの入学が増加している。何か取り組みなどされているのか伺いたい。一方でこころ未来高校からの入学者は減少している。何か考えられる要因があるのか。

（髙田）4 学科総合で見ると，ほぼ横ばいで大きな増減はない。地域や学校ごとの入学者数の推移については，特定の法則性などはなく，年度によって様々である。中長期的にみると長崎市からの入学者数が減少傾向なので対策を強化しなくてはならない。県内 80 校ほどある高校に校長が直接足を運ぶなどの取り組み

は行っている。

（藤原）県内の高校を最低でも3周りしているが，訪問して話を聞く中で，学校の状況に変化を感じており，大学進学傾向が増えている印象である。

入学者は前年度から2名増加したが，その2名を増やすために1年間闘っている。一方で減少するのは早いという現実もあり，維持，向上は極めて難しいと実感している。また工業系や商業系は，求人状況が良好なこともあり，就職も多い。大学や私学も定員割れが顕著で，希望者の大学進学へのハードルが下がっている。これらの経緯から，入学してくる学生の質も低下している現状がある。今の学生は多くが7割主義で無理をしない。それで何とかなってきている世代である。教職員には，カウンセラー的学生指導が必要となってきている。

就職に関しては，県内就職91.2%であった。今後も県内就職90%以上を目標に取り組んでいきたい。

（髙田）こころ未来高校の入学者については，令和6年度が減っているというより，その前年が多かったと言える。ここ数年間で見ると増え続けている。ただ，通信制の学生が多いので，本校進学後に学校生活になじめず，様々な課題を抱えることも多い。その対策として，入学前の時期に，こころ未来高校出身者だけを対象とした交流会を行うなど，取り組みを進めている状況である。

（森﨑）以前図書室だった部屋が治療室となっている。学生の学習環境への影響はないか。

（髙田）キャリアビジネス科が新設されたことにより，使用教室の関係で図書室が移動した。引き続き学生の学習スペースとして活用されており，他にもココガクという学習スペースを設けていることもあり，現在のところ特に問題はない。

６　閉会の挨拶

＜藤原校長＞

本委員会では，この2年ほど，学生の実習等における自主性や礼節，コミュニケーション能力などについて課題があるという指摘をいただいている。学校としては，教育目標に社会人基礎力の向上を掲げ，即戦力として活躍できる人材を育成すべく，日々意識して取り組んでいるところである。

キャリアビジネス科の新設にあたっては，3つの狙いがある。県内に必要な人材を育成すること，留学生のニーズにこたえること，日本語学校卒業後の県外への流出を防ぐこと，の3点である。日本語能力の補強も重要なテーマとしている。特定技能への移行が可能であるという点もこの学科の特徴である。

卒後教育については，昨年度の参加者が115名と増えており，内容についても，アンケ

ートでは高評価をいただいている。卒業生の資質向上，社会貢献，交流の拡大，広報活動への卒業生の関わりの促進などの思いを持った取り組みである。

学生の気質の変化もあり，指導は難しくなってきている。本校の存在意義を意識し，プラス思考で学校経営にあたる所存である。責任を全うして参りたいと考えているので，今後とも御支援をお願いしたい。